EICA Journal of EICA Essay エッセイ

エジプト7000年を巡る旅

A journey through Egypt's 7000-year-old heritage

古　里　明　瑠
Akaru Furusato

EICA名誉会員

1. エジプト文明

世界4大文明の一つがナイル川河畔に起こったエジプト文明で，他のチグリス，ユーフラテス川のメソポタミア文明，インダス川のインド文明，黄河の中国文明ともに，川が文明発祥に関わっていることは，水処理に関わってきたものとしても興味深い。

これらは，それぞれ文字も創造しており，世界最古の文字板として有名なロゼッタストーンは，大英博物館（ロンドン）の目玉展示物になっていて，訪れるたびに手触りを楽しんでいたのだが，最近は，直接手を触れることが出来ないよう透明板で覆われるようになってしまい，残念である。

それはさておき，今回はエジプト（人口1億233万人，面積100万km^2＝日本の約2.7倍）の世界遺産を巡る旅について紹介することとしたい。

2. ギザのピラミッド，スフィンクス

カイロへは，直行便ではなく，便数の多いロンドン経由で，2006年6月5日15：30成田発，所要14時間半，時差（−6時間）の関係で当日の23時カイロ到着。郊外のピラミッドのあるナイル川西岸のギザまで移動して3連泊。部屋からピラミッドが見える。ホテル内はアルコールOK（エジプトはイスラムが国教なので原則禁酒）。 翌朝早速三大ピラミッドを見学。紀元前3200年に始まるとされる古王国時代の第4王朝期（BC 2500年頃）のクフ，カフラー，メンカウエラー王（ファラオ）の墓所とされるピラミッドは，まさに壮大である。基盤となる砂岩の上に巨石を積み上げた正確な四角錘で，最大のクフ王のピラミッドは，底辺230 m，高さ139 m，容積258万m^3　砂漠の中に屹立していて圧巻である。積み上げられた各段の石は，一辺が1.5 mもある立方体で，これらを当時の技術で，どの様にして積み上げたのか，諸説があるが，直に触れてみて，その大きさに圧倒される。ピラミッドは，全部で111基もあるとされており，当時のファラオの権勢がしのばれる。クフ王ピラミッドを見学後，北側に新設された太陽の船博物館へ入館，近くの石抗から1954年に発見，復元されたものを展示。全長42 m全幅6 m弱の木造船。1987年に第2の船も発見され，復元中という。太陽王クフの御座舟を副葬したと推測されている。

ギザのピラミッドとスフィンクス

続いて，隣接するスフィンクスを見学，ライオンの体に人頭が乗った彫像は，ピラミッドにも劣らぬ存在感でそびえたっている（全長約74 m，頭頂部高さ20 m，全幅19 m）。当時の宗教上の守護神とされる。ナイル川からピラミッドへ巨岩を運ぶ順路にある大岩が邪魔で，取り除こうとしたが，あまりに巨大なため，彫像にしたとの伝説があるそうである。ミーハーながら，勧められて初めてラクダに乗り，スフィンクスをバックに写真撮影。意外にこぶ面が高く見晴らしがよくて風が心地よい。

午後から，古都メンフィスに移動，ラムセス2世の巨像（10 m），サッカーラの世界遺産階段ピラミッド，屈折ピラミッドを見学。その後階段ピラミッド内部の基室まで入ったが，直射日光に曝されている外部と違って涼しく，巨石を精密に組み合わせて，通路空間を保っていることに感心した。

第3日目は，カイロ市内をバスで遊覧，アフリカ最大の都市（人口1,200万人）で，ナイル川をはさんで中心部はビルが建ち並び活気がある。川中島のゲジーラ島にあるカイロタワー（187 m）からの眺望で目立つのは回教寺院のモスク（この後モハメド・アリモスクは，中に入り参詣）。対岸の考古学博物館を見学。なんといってもツタンカーメン王のミイラを覆っている黄金の棺が目玉の展示物。その大きさとデザイン，細やかな細工には感嘆して見入るばかり。

3. アスワン，アブシンデル神殿

第4日目は早朝空路カイロ発，アスワン7：30着，アスワンハイダムの見学へ。世紀の大工事と言われたハイダムは，1902年完成のロウダムの力不足を画期

アブシンデル神殿

的に上回るもので，上流 6.2 km の地に 1970 年に完成。堤高 111 m，堤長 3,600 m，貯水量 132 万 km^3，湛水面積 5,250 km^3（琵琶湖の 6 倍）。ダム湖は当時の大統領名からナセル湖と名付けられ，ナイル川の氾濫防止，灌漑用水の通年確保，水力発電等大きな役割を果たしている。近くのフィラエ神殿では，切りかけのオベリスク（長さ 41 m，重量 1.150 トン）を見学，一枚岩から切り出す，当時の石工の高度な技術に感動する。更に空路で 45 分，アブシンデル着。バスで世界遺産第 1 号のアブシンデル神殿を 1 周して，ホテルへ昼過ぎ避難（？）。この辺は丁度この時期，赤道北回帰線直下に当たり，正午，自分の影が足元にしかできないのを初体験，とにかく暑い（炎天下は 50 ℃以上）。

アブシンデル神殿は，アスワンハイダムの水没地域にあったものを，ユネスコの支援で，岩山丸ごと移設したもので，その土木工事技術もさることながら，4,500 年も前に神殿正面に彫り込まれた 4 体の巨大なラムセス 2 世座像（全高 22 m）をはじめ，神殿本体を造り上げた当時の技術力には感服する。夜，砂漠性気候で肌寒く感じる中（20 ℃以下に急低下），アブシンデル神殿のレーザーショウを見学，砂漠の星空の下で，ナセル湖からの風が爽やかであった。

4. ナイル川下りクルーズ船

第 5 日目早朝，朝日に映えるアブシンデル神殿を後に，空路アスワンに戻り，9：00 ルクソール迄 3 泊 4 日のナイル川下りクルーズへ。船は平底 4 階建て屋上にプール付き，船室は中級都市ホテル並みの設備。午後，古式帆船に乗り換え遊覧。夜は船内ホールで，ヌビアン人（この地域人＝黒人に近い）のショウ。

第 6 日目は川を下って，ゴムオンボで下船，神殿を見学。紅色花崗岩の朽ちかけた巨大神殿。更に，観光馬車に乗って，エドフ・ホルス神殿を観光。夜は，船内ホールで乗船客参加の現地服ガラベーヤ（女性服のワンピース風）の股下にぶら下げた玉葱を，腰を揺らせて叩き落し合う競技に参加，少々卑猥な行動に大いに盛り上がり，優勝！。夜半になって，下痢。昼間，道端のサトウキビジュースを現地ガイドのおごりで飲んだのが原因か —— フレッシュで美味しかったのだが。こういう時は現地の薬が効くと聞き知っていたので，早速ガイドに貰って飲んだところ，軽快。他のメンバーの何人かは，以降寝込んで現地ツアーに参加できなかった人も。

第 7 日目は，ルクソール西岸観光。ルクソールは，宮殿の町の意で新王国時代（BC 1568～1085）首都として栄えた地という。西岸は日の沈む「死者（墳墓）の都」と言われている。河港から 1 対のメムノンの巨像（高さ 18 m）の間を通って，さらに西へ進むと岩山の麓に幾つもの葬祭殿があり，中でも華麗なのがハトシェプスト女王の総祭殿である。さらにこの岩山の裏手は，王の墳墓が多数埋まっていて「王家の谷」と呼ばれている。考古博物館に展示中のツタンカーメン王の墳墓（地下 3 m 位）もあり，金の棺が入っていた覆い箱が，そのまま残されていて，発掘の様子が体感できるようになっている。砂漠特有の厳しい自然の中で，今も発掘が進められていて，新たな発見が期待されている。夜は，船内ホールでベリーダンスショウ，独特の腹を揺すりながらの踊りは，扇情的で異国情緒を満喫。

第 8 日目は，ルクソール東岸，太陽の上る「生者の都」の象徴カルナック神殿と隣接のルクソール神殿を見学。何代もの王に引き継がれながら 3 千年以上も前に構築された 100 ヘクタールに及ぶ壮大な建造物群が，今は廃墟と化し，回廊の柱列，壁，塔門が残されているのみながら，巨石を積み上げた遺構は壮大で，往時の繁栄がしのばれる。ルクソール神殿第一塔門脇の 25 m もあるオベリスクは，西側だけ残っており，東側のものは，1833 年持ち去られパリのコンコルド広場に移設されている。

第 9 日目は，乗船初日に注文したエジプト古代文字ヒエログリフ（象形文字）で名前を刺繍したポロシャツをお土産にもらってクルーズ船を下船，ルクソールから空路カイロへ所要 1 時間。市内で自由行動（買い物等）の後，夕方カイロ発帰国の途へ。砂漠性気候と世界最長のナイル川（6,650 km）の恵みを体感した，エジプト 7,000 年の歴史遺産の旅を終わる。